

パーソナルツーリズムをターゲットとした地域資源の再構成

西村 俊

北陸先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科（融合科学系）

Reconstruction of Local Resources Targeting the Personal Tourism

Shun NISHIMURA

Division of Transdisciplinary Sciences, Graduate School of Advanced Science and Technology, Japan Advanced Institute of Science and Technology (JAIST)

はじめに

産業・エネルギー革命やハーバー・ボッシュ法による空気中の窒素固定化技術の工業化に代表される科学技術の発展に伴い、世界人口はこの 100 年余で急激な増加を記録している。推移予測では 2050 年までにほぼ 100 億人に達することが見込まれ^[1]、資源（エネルギー・食料など）やサービス（医療など）の不足、環境負荷の増加が懸念されている。

一方、日本の人口は約 1 億 2600 万人余で、2008 年の 1 億 2800 万人をピークに緩やかな減少期を迎えている。合計特殊出生率は微増傾向を示しているが出生数は依然減少傾向が続いており、2050 年には 1 億人を下回ると推計されている^[2]。日本国内の労働人口の減少も深刻であり、現行の社会構造基盤の維持が困難となってきている。そのため、外国人労働者の受け入れ拡大や「働き方改革」を合言葉とした兼業の容認・従来サービス形態の見直しが各方面で議論・実施され始めている。実際にコンビニやファミレスの 24 時間営業の縮小、宅配サービス形態の見直しなど、より身近な話題に触れる機会も多くなっている。

長年、過疎高齢化の先陣とされてきた中山間地域は、実際に超限界集落や消滅集落となった地域もあり、より現実的な危機感に直面している。更に中山間部にとどまらず、都市部の住居／商店の空洞化や（中山間地よりも

立地が良さそうな）平野の集落においても「血縁による世代交代」による集落の継承が危ぶまれる地域も出ている。人口減少時代の到来に伴う従来の社会基盤を継承する困難さを実感する機会は、中山間地域のみならず身近な集落、日本全国各所における普遍的な危機となりつつある。

例えば、平野部の 40 代後半から 60 代を中心に構成されている顔なじみが多い集落では（山間部では +10～15 歳）、親の代からこの集落に住み、自らが幼少期を過ごし、子育てもその集落で経験してきた人々が中心である。その子どもたちの多くは大学進学ないしは社会人生活のために集落外で暮らしており、子どもたちが戻ってくるまでの期間（数年～数十年）は、集落構成員の平均年齢の増加、集落人口および子どもの減少、さらには空き家の増加といった現在の中山間地と同様の課題に直面することとなる。新しい住人の受け入れ機会の創出（ex. 空き家の借家化、農地の宅地化による分譲）や集落行事の粗放化による負担軽減を図ってもいるが、町会の役職を担える人材の不足や比較的新しい住人との意識の違いもあり、平野部においても集落の展望を案じる声が少なからず聞こえている。

ここでは、2019 年白山ろくぼたん鍋プロジェクトの視察で訪れた北陸の 2 事例（平野部と山間部）を紹介し、個人を主体とした観

光意欲をターゲットに地域資源の再発見・再構成・再発信による地域の新たな賑わい形成について考えてみたい。

平野部：富山県砺波市・農家レストラン大門^[3]

富山県庄川の扇状地には、国内最大規模の散居村（散村）がある。一般的な集落は、家々が一か所に集まり田畑を別に構える「集村」形態であるが、「散村」では各家々の母屋と田畑が独立している。高台からは母屋が田畑の中に点在している特徴的な形態を見渡すことができる（図 1）。高台から日本海を望む景観や水を張った水田に夕焼けが映る風景が、観光資源として注目されている。

この地域の散村の成立要因については、i) 庄川の扇状地に位置しているため地表土が薄く洪水を避ける必要を考慮してできるだけ耕土の厚い所・地盤が良い所に住居を建てその周辺を開拓した、ii) 雪国なので家の近くに田畑があると降雪時期の収穫が楽であった、iii) 幕府の年貢計算をあいまいにするために家々の領土境界を分かりづらくした、など諸説が考えられている^[4]。なお、同じように広大な扇状地形を有する石川県手取川流域は散村形態ではなく島集落（集村）形態であり、その成立要因は暴れ川と称され



図 1 砺波平野（庄川流域）の散村風景。写真中央から奥へと広がる田畑の中に母屋が点在する様子が分かる（クロスランドおやベタワー展望フロアより）。^[5]

る手取川の氾濫に備えて高い土地に集落を構えたこととされている。従って、扇状地形だけではなく地域の文化や歴史的な背景がこの地域の散村形態に影響していると推定され、大規模な散村形成に至った背景の考察は今もなお興味深い。

「農家レストラン大門（おおかど）」の開業は、大門地区で 4 年ほど空き家になっていた伝統的家屋（吾妻建：あずまだち^[6]）の活用について、砺波市から当時区長であったご主人（境貞雄さん）にその利活用に関して継続的に相談があったことに端を発している。丁度その頃、奥様（境嘉代子さん）が食生活改善推進員として地域に伝わる郷土料理に関心を寄せていたこともあり、部落の有志 5 人が集い、それぞれが 3 人を誘って総勢 15 人で株式会社を設立し、始めたのがこの古民家レストランである。砺波市の空き家対策モデル事業の第一号として北陸新幹線開業と同年の 2015 年 3 月に開店し（図 2）、4 年半で累計 5 万人の来客を集めている（年平均 1 万 2000 人程）。

提供される料理は、昼の部では伝承料理（とらみ野の伝統料理）を中心としており、「ゆべす」（金沢では「べっこう」とも言わ



図 2 レストラン大門の入り口（築 122 年の母屋）。家々が孤立しているため、このような伝統的な家屋には暑さ対策として大きな屋敷林（カイニョと呼ばれる）がある。

れ、寒天に溶き卵とショウガを入れて固めたもの)、「よごし」(大根の葉やナスなどの野菜をゆでて味噌で味付けをしたもの)、「いとこ煮」(根菜類を固いものから順に追い追い→おいおい(甥々=いとこ)煮たもの)、「大門素麺」(江戸末期に能登からこの地に技術が伝わった製法で、長く細い丸まげ麺)などが漆器の御膳に彩りよく据えられている(図3)。女将さんのモットーとして「化学調味料を使わない。できるだけ薄味でおいしくしたい。“袋物”は出さない。」ということが徹底されており、伝承料理の素材の味を楽しむことができる。また、漆器はすべて輪島塗を使用しており、約160脚がすべて手洗いで管理されている。夜の部では、ディナーショーなどイベントを兼ねた利用も行われており、伝統的な家屋の風情を活かした様々な楽しみの演出にチャレンジしている。

レストラン大門は、観光の目的地にもなれば、近郊の観光とともに立ち寄る経由地ともなりうる。伝統的な佇まいの空き家の利活用と地域で普段慣れ親しまれてきた伝承料理の継承の両方を実現しながら地域の賑わい創出に貢献している先駆的な事例の一つといえる^[7,8]。女将さんによると、課題としては、年間を通じて安定的した来客・収益を確保すること(12~3月は天候の影響が大きい)



図3 レストラン大門の伝承料理(白雪姫)

と今後の担い手への継承を挙げられていた。白山ろくのイベントでも降雨時には集客が下がる傾向にあり(ex.梅雨)、季節や天候はツーリストをターゲットとする上での共通の課題でもある。

山間部：石川県白山市・瀬波川キャンプ場^[9]

石川県白山市を主に流れている手取川は、日本3霊山の一つである白山から日本海に注ぐ流路延長72km、流域面積809km²の一級河川である。その支流の一つに「瀬波川」がある。瀬波川は、大笠岳(おおがさだけ)と笈ヶ岳(おいずるがだけ)を源流とする一級河川で、旧吉野谷村瀬波地区(現白山市瀬波)を流れる。瀬波には天然温泉・食事処・宿泊・研修所を複合化した交流拠点「白山里」(2003年7月開業)もある。

瀬波は、以前は炭焼きを主な生業とし80軒ほどの集落を構成していたが、現在は20軒(40人)に減少しており、ほとんどの家庭が町にも住居を所有する「二地域居住」である。白山ろく(旧5村)では、子どもの高校進学を機に金沢市街地に第二の住居を構えるケースが多い^[10,11]。

瀬波川キャンプ場は、現取締役事業本部長である廣崎邦夫さんの退職を機に、地域の有志11名と協力企業(㈱中央設計技術研究所)



図4 瀬波川キャンプ場の外観

が出資することで設立した(株)白山瀬波(2015年10月設立)の活動拠点の一つである。生まれ育った瀬波集落を残すための賑わい作り・交流人口の増加を目的に、ビジネス(生業)ではなく「人々がこの集落を訪れてよかったと思ってもらえる場作り」を目指している。管理棟(白山市の未利用施設であったものを購入したログハウス2棟)およびテントサイト(図4)の他、炊事場、水洗トイレ、川遊び場などから構成されている。

メンバーが中心となった「白山瀬波の会」によって、キャンプ場に隣接した恐山(オンソリ山)の登山道(1.7km、所要時間1.5時間程度)の整備・管理も進められている。この登山道は、現在では知る人ぞ知る「日本最大級の野生のカタクリの群生地」(図5)となっており^[13]、インターネットで情報を調べて東京からカタクリを見に訪れる人が出るほどの看板の1つになりつつある。「カタクリ」は元々炭焼きが盛んに行なわれていた同地区では多い野生種だったが、昨今は雑木に覆われて目に留まる機会が少なくなっていた。登山道整備を行う過程で雑木などを取り払ったことを機に、偶然に生息域が拡大し復活を遂げた地域資源である。最近では、恐山の山頂より30分程進んだ場所に「白山の修験者が修行を行った祠(馬の宿、ウマノヤ

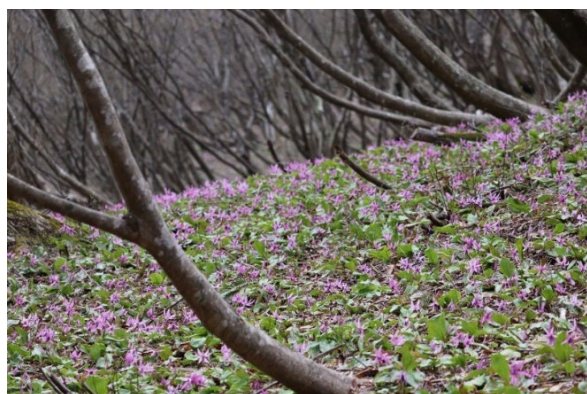


図5 恐山登山道のカタクリ群生地^[12]

ツボ)」も発見され、白山信仰の歴史に触れることができる希少なスポットにもなっている。

設立4年目のキャンプ場利用者実績は400組2,000人前後であり、その内40%程度がリピーターを占めている。なお、キャンプ場の雰囲気維持およびオーバーツーリズムによる資源の消耗を防ぐ観点から、同キャンプ場では利用規模の制限を設けており、1日に利用できるのは10組(50名)まで。また、冬季は積雪に伴いキャンプ場は休業する(利用期間:4月15日~11月30日)。

設立当初は「来客のために何かしなければならぬ…」と身構えていた部分もあったメンバーだが、実際の利用者のニーズとしては、(トイレと水があれば)場を与えて放っておいてほしいと思う世代・客層が多いという。瀬波川キャンプ場では「ありのまま」が評価されており、メンバーの活動によって往来人口の増加と賑わい創出だけでなく、地域資源の再発掘にも繋がっている興味深い事例である。

おわりに

テレビ番組の「ポツンと一軒家」(朝日放送テレビ制作)が高視聴率を続けている。ここで紹介されている人間模様は、亡父母(ないしは自ら)が築いた家屋と田畑を守りながら、山村での生活を営む姿である。山間部に“ポツン”とある一軒家の住人の歩みを切り口に、「昭和を生き抜いてきた人々の自然観」や「日本の山村における生活スタイル」を紹介している。現代的な生活を過ごす多くの人々(視聴者)にとって、ここで紹介される原風景が新鮮に映っていることが大ヒットの原動力となっていると推察される。取り上げられている山村の風景や生活スタイル

の存続が危ぶまれている状況 (ex. 郷土食も作れる人が少なくなっている) に目を向ける視聴者は多くはないかもしれないが、ごく日常の中で中山間地での生活の一端に目を向ける機会を創出している。

映画「リメンバー・ミー」(2017) は、ピクサー作製・ディズニー配給の長編アニメーションである。家族の掟 (音楽禁止) に反感を抱いていた主人公のミゲル少年が、年に1日、他界した先祖が家族に会いにやってくるという「死者の日」に、死者から盗みを働いてしまうことで「死者の国」へ送られてしまう。ストーリーが進む中で、祭壇に写真を飾らなくなることや死者を忘れてしまうことが、亡くなった後の世界にどのような影響を与えているかを知る。また、「家族の掟」が築かれた背景に潜む真相に触れ、普段から自宅の祭壇に飾られていた“顔なじみのご先祖達”の助けを借りながら、先祖の名誉回復に奮闘する。ストーリーとして感動を得るだけでなく、自身の死者 (先祖) への敬意や信仰の形、死後の世界観を再考する機会をミゲル少年の成長とともに得る映画でもある。通過儀礼を繰り返し経験する過程で、年齢の積み重ねとともに信仰について理解を深める従来のアプローチと対比すると、エンターテイメントの視点に立って映画を通じて多くの人に信仰や先祖への思いを回顧させる新たな時代のアプローチとして捉えることもできる。

テレビや映画に限らず、書籍、講演会、劇、音楽、絵画、祭り、建築物、旅、病气、死別、通過儀礼、様々な場面を通じて「非日常」を味わうことで、「日常」に戻る活力や日常生活では見えにくい視点 (世界観) を再考する機会に接している。また、同じテーマの題材であっても、様々な表現や切り口からの表現

が可能で、そこから発せられるメッセージやインパクトの受け方もそれぞれ受け手によって異なってくる。地域資源の発見や再構成の方法においても、様々なチャンネルを持つことがその可能性を広げるきっかけに繋がるのではないだろうか。

東京ディズニーリゾートは、日本全国 (ないしは海外) からわざわざ旅費と時間をかけてでもそこを訪れたいと人々を魅了する超人気スポットの一つである。ホテル、テーマパーク、レストラン、複合型商業施設の各所において、多彩なエンターテイメントを演出し、年齢やグループ構成を問わずに身近に楽しむことができる (ショーチケットの購入が難しいなどの課題はあるが…)。ディズニーアニメーションをきっかけにその場を訪れることで、それぞれの視点で、ミュージカルやダンス、建築・造形物、演出を通じてその空間を楽しみ、多様な興味・関心の引き出しを開けることができる複合的なテーマパークである。ディズニーでのショー鑑賞をきっかけに、他のミュージカルや劇団の公演に足を延ばす人も多いのではないだろうか。役者やダンサー、スーツアクター、キャストの活躍の場としての機能も重要な要素である。

私の恩師の一人が、「週末ディズニーランドに行って一日に何万円も使う人がいるのに、なぜそのお金で週末に農山村を訪れて体験に使うことができないのか」とおっしゃっていたことがある。では、東京ディズニーリゾートが人々を魅了する要素から学び、中山間地の振興策へと活かす方策はないだろうか。環境教育/環境学習の視点から、この数十年来、「農山村エコミュージアム」や「地域まるごと博物館」といった取り組みが各所で取り組まれている。訪れる地域での身近な伝統知や自然を複合的に楽しむことで、その

永続的な活用と伝承・保全を実施する取り組みである。しかし、地域の力の維持が難しくなっている状況下においては、「地域」をより広域に捉え再構成（広域連携）する必要があるのではないだろうか^[14]。

今回の視察で訪れた場所は、それぞれの地域資源を再評価し、新しい観光資源として再構成することで、新たな賑わいの場として魅力を再発信している地域の拠点である。石川県内でも、以前視察を行った「春蘭の里」（旧能登町）の民泊・農業体験活動や「神子原地区」での文化体験・農産品販売戦略（羽咋市神子原）^[15]、白山市白峰地区における「雪だるまカフェ」における食体験や「石川県立白山ろく民俗資料館」を拠点とした伝統文化の体験・継承イベント^[16]、耕作放棄地での放牧による「白山羊」（白山市木滑）や野獣肉を素材とした「白山麓猪ふもと鍋」（白山ろく）・「のとしし大作戦」（羽咋市）の取り組み^[15]、「加賀野菜」の認定による地域ブランド作り（金沢市）^[16]、など新しい賑わいや産業・伝承構造の拠点が点在している。

より小規模な店舗ごとの取り組みでは、例えば和倉温泉のある旅館では、能登名産のスイゼンや赤大根（能登むすめ）料理、石川県木翌檜（アテ）の葉を用いた演出に触れることができ、金沢市片町のある割烹では、石川県立美術館所蔵の国宝「色絵雉香炉（イロエ

キジコウロ）」と同様の器で食事をするができる。いずれも地域資源を生かしたストーリー性を演出することで、その地・お店を訪れた人々の印象に残る取り組みである^[17]。

このような大小さまざまな各地の拠点を繋ぎ、点から線へ、そして面へと、情報や物流・イベントをストーリー化し、広域・複合的な「地域」の楽しみ方をパーソナルツーリストに発信する仕組みを作れないだろうか。以前、里山資源と個人のツーリズム意欲を繋ぐ仕組みとして、「里山コンシェルジュ」を提案した^[18]。同じような視点に立ち、点在する地域資源の拠点を繋ぎ、パーソナルツーリズムのプランニングを手助けすることで、新たな個人の楽しみ方を創造できる可能性があるのではないだろうか。個人をターゲットとすることで、個人の発信力に委ねた新しい集客力が期待できることも、今の時代のメリットである。

白山ろくぼたん鍋構想は、地域の住人やそこを訪れたファンが、それぞれの素材を持ちより、まるで鍋を作りながらその鍋の素材を楽しみ、賑わいを形成する過程を表現している（図 6）^[15]。それぞれの賑わい拠点に人が集い、多様な鍋を考案し、点在した各地域の鍋を巡り歩くような広域連携のツーリズムの育成が、地域資源を題材とした今後の三方よしの形として根付くことを期待したい。

（2020 年 3 月）



図 7 白山ろくぼたん鍋プロジェクト構想のイメージ図^[19]

参考文献等

- [1] 国際連合広報センター (<https://www.unic.or.jp/>)、国際連合世界人口推計 2019 年版
- [2] 総務省統計局 (<https://www.stat.go.jp/index.html>)、統計データ

- [3] ぼたん鍋プロジェクトにて視察 (2019 年 7 月 21 日実施)
- [4] となみ散居村ミュージアム (富山県砺波市) 展示資料より
- [5] 金沢町家ゲストハウス あかつき屋、2019/7/21 ブログ (掲載許諾済み)
- [6] 母屋の正面を東側に向けていることからアズマダチと呼ばれたといわれている。
- [7] 平成 28 年度クローズアップ北陸農政局長賞「地産地消給食等メニューコンテスト」(外食・弁当部門) を受賞
- [8] テレビ朝日「人生の楽園」～古民家で味わう伝承料理～にて特集 (2017 年 4 月 1 日卯月の巻)
- [9] ぼたん鍋プロジェクトにて視察 (2019 年 11 月 17 日実施)
- [10] 白山ろくには高校が無かったため、旧 5 村で出資して高校に通うための寮を街に用意していたこともある。
- [11] 2018 年 4 月に金沢工業大学が母体となって「国際高等専門学校」(白山麓キャンパス) を白山市瀬女に開学し、白山麓で「グローバルに活躍する力を育てる」教育の場を築く取り組みを始めている。但し、白山麓からの進学者が多いわけではない。
- [12] 株式会社白山瀬波、2019/4/5 ブログ (掲載許諾済み)
- [13] NHK 名古屋放送局”ウィークエンド中部”「ゆる山へ GO!」にて紹介 (2019 年 4 月 13 日放送)
- [14] 「撤退の農村計画」(林直樹、齋藤晋編著、学芸出版社、2010 年) では、集落の「積極的な撤退」による国土の戦略的な再構成の可能性が提案・議論されている。
- [15] 西村俊、「白山ろくボタン鍋プロジェクト構想 = 発案から 10 年 =」、民族植物学ノオト 12 (2019) pp. 2-11.
- [16] 西村俊、「中山間地域のホームガーデンと地域活性化策から捉える地域形成の変化 : 石川県白山ろく地域の暮らしぶり」と栽培植物の利活用の視点から」、環境教育学研究 (特集: ホームガーデン: 自給農耕と生物文化多様性) 23 (2014) pp. 71-87.
- [17] いくつかの事例は、植物と人々の博物館 (博物館日記, <https://ppmusee.blogspot.com>) にて紹介しています。
- [18] 西村俊、「里山資源の活用に向けた伝統的・科学的知恵体系の変化と展望」、民族植物学ノオト 10 (2017) pp. 14-24.
- [19] 制作: オギノシエ+はやのん理系漫画制作室